

**(最終回！) JICA 国際協力中・高校生エッセイコンテスト 2025
表彰のご案内**

～全国 29,854 作品中、札幌国際情報高等学校 2 年・三浦かなさんが「国内機関長賞」を受賞～
2026年2月20日(金)12:00～ 北海道札幌国際情報高等学校

国際協力機構（以下、JICA）は、開発途上国の現状や日本との関係について、中学生・高校生の理解を深め、国際社会の中で日本が、そして一人ひとりが、どのように行動すべきか考えることを目的に、本コンテストを毎年開催して来ており、今年度の実施で高校生の部は 64 回目、中学生の部は 30 回となりましたが、何れも残念ながら今回で最終回となります。今年度は高校生の部に 17,911 点、中学生の部に 11,943 点の応募が寄せられました。今年度のテーマは「世界の幸せのために私たちができること～未来へつなげるために～」でした。身近な環境問題や世界平和に関する作品、また日本国内の課題解決を考え、行動し、自分ごとにつなげた作品が多くありました。

本表彰式には、JICA 北海道所長の中川岳春が出席します。

つきましては、本イベントの取材をご検討いただきたく、ご案内申し上げます。

【受賞作品のご紹介】

「わたしの循環型社会実証実験」札幌国際情報高校 2 年 三浦かなさん

下川町で助け合いの暮らしを通じ“循環型社会”を学んだ三浦さん。小学生時にごみ削減プロジェクトを企画し、中学生時にはバイオマス研究に挑戦。高校生として訪れたマーシャル諸島ではごみ問題を見つめ、「私に何ができるか」を考え、行動と思索を重ねた軌跡をまとめた作品です。

【開催概要】

開催日時:2026年2月20日(金)

開催方法:北海道札幌国際情報高等学校(北海道札幌市北区新川 717-1)

・12:00～ 校長室にて表彰

※受賞生徒への取材は、定期考査後の 11:45 から対応可。



(写真:他校の表彰式の様子@校長室)

参考 URL:<https://www.jica.go.jp/cooperation/experience/essay/index.html>

別添:受賞作品

【本件に関する問い合わせ先】

JICA 北海道(札幌) 市民参加協力課 桐山

TEL : 011-866-8421 e-mail : Kiriyama.Asumi@jica.go.jp

- 1, わたしの循環型社会実証実験
- 2, 北海道札幌国際情報高校
- 3, 2年
- 4, 三浦 かな

2017年「第一回ジャパン SDG's アワード」総理大臣賞を受賞した、人口 3000 人弱の北海道の町をご存知だろうか？答えは、下川町。下川町は、持続可能なまちづくりのトップランナーとして世界中から注目されている。それなのに、日本にはあまり知っている人がいなくて、下川町というと「スキージャンプ？」としか返ってこないのが残念だ。縁あって、私はこの下川町で小中学校時代を過ごした。今、そこから離れてみてそのすごさを実感している。

下川町は、私が生まれるずっと前から経済・社会・環境の調和による持続可能な地域社会づくりをコンセプトにしていた。今では SDG's の目標となっているこのコンセプトをいち早く取り入れていたのだ。そして、誰一人取り残さない社会というのをみんながすごく大事にしている。小さな町ならではの、お互いの顔が見える近所付き合いがとても心地よかった。夏に家に戻ると、玄関に野菜が置いてある。おすそ分けは当たり前で、ちょっとずつ近所さんに配る。大雪の日にドアが開かなくて困っていると、近所のおじいちゃんが助けしてくれる。車が雪に埋まると近所の人が出てきて助けしてくれる。そんな、ちょっとした親切の循環ができて下川町での暮らしは私に循環型社会という概念を教えてくれた。

私もこの町の循環の輪に入りたい。そんな思いで私は「ゴミを拾わなくてもいい」ゴミ拾いを課題研究で始めた。町民のやりたい！を後押ししてくれる有志の集まりがあり、12歳だった私のこのプロジェクトにたくさんの人が協力してくれたのだ。

ただゴミを拾うだけだと、そのうちまたゴミが増える。きれいな状態を維持する仕組みを作らなくては意味がない。そこで、町の人に自分の活動と、ゴミの量を発信していった。不法投棄が少なくなったポスターの事例を調べ、下川町の PR をしながらゴミのポイ捨てを防ぐポスターを街中に掲示した。こうしてだんだんとごみが少なくなり、ゴミ拾いに行く必要がなくなった。小学生の私がこのプロジェクトを達成できたのは、下川町だったからこそだ。

中学校では大好きな科学でこの町を変えたいと思い温泉施設のバイオマスエネルギーを効率よく燃やす研究をした。近所のおじいちゃん達から、温泉の温度がいつも違って困るという話を聞いたからだ。燃焼効率を上げると資源を有効活用できる。

実用化まではいかなかったけれど、学生の私にも町のためにできることがある。一步踏み出すことで社会は変えられる。そんな確かな手応えを与えてくれたのが下川町だ。

昨夏、私はマーシャル諸島を訪れる機会があった。どこまでも広がる透明で美しい海。しかし、その近くには大きなごみ置き場があってバスよりも遥かに高いゴミの山がそびえたっていた。JICA 職員の人から話を聞く機会があった。マーシャル諸島は今まで昔ながらの循環型の暮らしをしてきた。ところが、近年海外製品を多く輸入するようになり自然にかえらないゴミが出てしまっている。小さな島国でゴミを処理する場所、技術がまだ整っておらず、それを解決するために動き出している人がいるけれどまだまだ課題がたくさんある。やっにごみが一箇所にまとまりつつあるのが今の状況だった。

帰国後、私に何ができるかを考えていた。マーシャル諸島の人口は下川町の 20 倍。もちろん、下川町よりは顔と顔は見えにくいだろう。それでも、下川町のように豊かな自然と密接な近所付き合いはマーシャル諸島の強い武器だ。豊かな自然環境を今後も継承し、循環型社会を作るには今どう動くかが重要なターニングポイントとなる。

文系の方が得意なのに文理選択をした今の私の夢は、循環できる新素材を作ること。夢を叶えるための道のりはとても長い。けれど今の私は下川での経験からたくさんの応援してくれる仲間がいるということを知っている。(1581文字)